

を引止めておきたかった。その座に我々がゐても差支へはないやうであつた。かうした事を他家にまで平気で使つた。夜半でも起きてさへをれば、その門先を素通り出来ない風であつた。

出入りの商人にも親しんだ。下婢をも大切にした。決して呼び捨てにしなかつた。

かうした中に、とても几帳面な一面があつた。正しいと信ずると一歩も譲らなかつた。そうした場合、相手が悪いと解るまでは順々と言葉を重ねて行く風であつた。重病の床にゐる頃であつた。わからず屋の新聞配達夫の二人を前に置いて、順々と非を解き聴かせて居たが二人は點頭けなかつた。しばらくすると、突然に、

「馬鹿ッ」

の言葉が耳をつんざいた。と同時に二人の駆け出す慌たゞしい足音が遠く聴へた。私は嘗てそれだけのすさまじい兄の怒り声を耳にしなかつた。思はず失笑すると、やがてそれに釣り込まれた兄の笑ひ声も起つた。

かうした一而は殊に我々兄妹に烈しかった。文章の代作など、頭からどやし付けられた。又容易にいいとは云はなかつた。筆さへ入られて呉れないのを恨んだ事すらあつた程であつた。従つて芸術の上には妥協を許さなかつた。又非常な我侷を通した。その為に、殊に親戚の人々から誤解を受けた。仕事には極力の反対を受けて居た。遂には見離されもしたが一向平気であつた。

作品にも好意を持たぬ人があつた。扱ひ者の無理解から、無名だつた兄の作品は優遇されなかつた。でも不平は一言も口にしなかつた。

「今にきつと……」

と言ふ意を明かに見る事が出来た。仕事の為には極めて身体を粗

末にした。夜を更した。三、四日のぶつ通しの徹夜は平気であつた。この癖は赤坂時代からであつた。

その頃私の弟が兄を訪ねた事があつた。夜中まで待つて遂歸る時を失なつた侷、そこに伏せてしまつた。兄に起されたのが三時であつた。兄はその時間友達の家から戻つた処であつた。

さうした不規則な生活の十年が兄の肉体的生命を縮めてしまつた。此一年二年は、務めを持つ私とは正反対の起床をして居た。

「晝夜轉倒居士」

かうした綽名さへあつた。

兄弟に月夜の馬車となりにけり

私は時々腹を立て、兄の不為体を怒つた。その時にも心からは憎めなかつた。ある雑誌を経営してゐた頃、よく私は田端の奥に兄を訪ねた。大抵は仕事の中に、平気で昼を眠つて居た。待ちあぐんだり、眠気半分の叱責に会つては慌てて帰つた事が度々であつた。三日もすると兄から手紙が届いた。皆さうした場合の心からの詫びの手紙であつた。その度に優しい心情に涙ぐまされた。

前後一回曲水の例会で上野花山亭で一緒に句作した事がある。その時納める会費を失念した事を翌日になつて気付いた侷を兄に話した。すると、私のまで納めておいた事を始めて漏らした。

又一つ、鳴雪翁の古稀の祝句を曲水で募つた事があつた。私も勿論会員としての一句を差出したが、メ切後になつても私の句のないのを、その時幹事であつた兄が心配の余り、手もとにあつた私の数句の中から仮に一句を選んで置いて呉れた事があつた。かうした裡に切実な愛情をよく見せた。